



三條北ロータリークラブ週報

PUT LIFE INTO ROTARY — YOUR LIFE

ロータリーに活力を—あなたの活力を

国際ロータリー会長 ロイス・アビー 第256地区ガバナー 榎内悌三郎

例会日

1988. 8 . 6

累計 No 85

当年 No 6

会長／梨本 清一

幹事／今井 克義

SAA／米山 忠俊

例会日／火曜日 PM12:30～1:30

例会場／三條ロイヤルホテル ☎34-8111

事務局／三條市西四日町3-15-34
ヒューマン・ハーバー内 ☎35-7160

行事：卓話「JICAのことについて」岩崎重義様

出席：本日の出席 40名中32名

先週の出席率 40名中36名 90.00%

先週のメークアップ：8月3日 三條RCへ 中條耕二君

ゲスト：Mr.Kyin Thein, Mr.Zhou Qingnong, Mr.Hussein Khamis Saad,
Mr.Zaini Rachman, Mr.Sri Lesmonodjati, Mr.Kim Hak-Kyu,
Mr.Muhammad Qasim, Mr.Lorencito M.Pacatang,
Mr.Upendra Ariyaratne, Mr.Vichien Sriswasdi,
Mr.Suphasit Sngiamphongse, 以上JICA研究生11名
筑波国際農業研修センター 若月修先生 三條製作所 岩崎重義様

会長挨拶：梨本会長

私は、三條北ロータリークラブ会員とその家族を代表して、皆様方のご来訪を、心より歓迎致します。まず最初に私どもクラブから此の度の申し入れを快く受け入れて下さった筑波研修センター所長と皆様方に心より御礼申し上げます。私どもとの交流は一泊二日という大変短い時間です。しかしながら、私達はお互いに言葉や文化や習慣の違いを乗り越えて、交流を深めることが出来ると確信致します。そしてお互いの友情が継続出来るならば、それはこの上もない喜びであります。我々は皆な友達です。お互いに、素晴らしい二日間となることをお祭り申し上げます。くしくも、今日はヒロシマ原爆43周年の記念日であります。平和への祈りが世界中から聞こえてくるようであります。此の度、我が北クラブが取り組みました東南アジア9ヶ国、11名の皆様方との交流は、それこそ小さな小さな出来ごとではありますが、世界平和に貢献しようとする我が北クラブの願いだけは天にとどいて欲しいものと思います。

幹事報告：今井幹事

◇三條南RC休会のご案内

日時 63年8月15日(月) お盆により

◇分水RC休会のご案内

技術を勉強に来る方々の為に外国から来た研修生の為の設備と言うのが沖縄から筑波までの間に7ヶ所、農業あり工業あり漁業あるいは文化その他を含めましてそれだけの設備を持っている訳です。こうゆうふうな大きな仕事を実は事業団の皆さんがやっていらっしゃる訳です。ここでこの事業団と言うものを良く理解して載くと、実は事業団の生き方もロータリークラブの気持も輪を広げて行くお互いに豊かになって行こうと言う訳では共通している訳です。ただ違っている所はそれが個人的な活動であるかあるいは国としての活動であるかと言う違いになっている訳です。で私は一つの例としてケニヤで農業、工業の短期大学と言うものが10数年前から計画されケニヤ政府が敷地を提供し建物を造くり日本から先生が行き向こうの教授を育てると言う事を根気よくやっております。こうしたものがいつ役に立つのか、今すぐ役立つのかと言うふうな事は長い目でみなければいけない事だと、とにかく国際協力事業団というものの動きについては新聞、テレビの論調は冷たいのです。あんなにお金をかけて何んの成績も上がらなかったのではないかと1000億からの税金をかけて無駄じゃないかと言うふうな事がしばしば書かれるんです。けれどもヨーロッパ、アメリカ、ソ連どこの国をとりましてもこの技術協力と言う物の中には非常にむずかしさがある。何故かと申しますと、とにかく工業で進んだ国は工業開発がいいんだと言う意見を持ちますし、食べる物さえつくればまず食べる事からなんだと云って農業に力をそそぐ人達の意見の相違をきたしたり、あるいは日本のように工業力が無い国へ新しい機械を造る事を起こそうとしても簡単には行かなかったという様なにがい思いをしながらも、一つ一つの努力の中でそうした事業団の事業というのは進んでいる訳なんです。ですから長い長い目でみて今までかけたものがどう役にたつか、どう役に立つかじゃなくて、受け取った国の人達がどういうふうに生かして下さったかと私は実際に専門家と云う仕事を載いて事業団から派遣されて現地の方で感じた一つの事は、現地の人達との気持のつながりをどうゆうふうにつけたらいいんだらうかとこれ一つにつきると思うわけです。技術と一緒に気持とこれは非常におかしいです。工業と言うのは気持だとかつまらない情緒は全部カットしないとうまく行かないという一面をもっている訳です。もっているにもかかわらずそういうものを考えなければうまくつながって行かないというのが途上国にある文化なり、あるいは宗教なりの考え方じゃないかとこんなような事も実は思う訳です。色々な事は一つ一つ取って行きましても、ぜひ皆さんその機会ある事に国際協力事業団、JICAと言うものの活動がどこかに出ている時に私が説明した事を多少なりとも思い出して新しい目で、日本のよその国とのお付き合いのやり方とあるいは今後どうしたらいいんだらうかと言う様な事をみて戴きたきと思いますし又公式発言は別にして、こうやって色々な国々の方と直接お話をすることによって三條には又新しい考え方の目が出るんじゃないかろうかと、そうゆうふうな意味合いも含めまして国際協力事業団との今日のつながりがあった事、又ロータリークラブの中に新しく動きをもって来た事、国際交流とかと、どうかと言うむずかしい話お互いに肌と肌を接して一緒に食事して、そしてお互いに顔なじみになって行くと言うステップがあってこそ初めて国際交流とかあるいは国際協力とかと言うものが育って行くのではなからうかとそんなふうを感じる訳でございます。大変つたない事で恐縮でございますがこれで失礼致します。

8月9日例会：卓話 国際奉仕委員会

8月16日例会：例会日変更

日時 63年8月16日(火) お盆より

◇分水RC例会変更(時間・会場)のご案内

日時 63年8月23日(火) 午後7.00～

会場 寺泊町 住吉屋

卓 話: 三条製作所 岩崎重義様



北ロータリークラブの皆さん私はロータリークラブには所属しておりませんが、常々皆様方のご活躍には大きな敬意と同じ様な気持を持っております。今日は若月先生が引率されまして外国から日本に来ておられるお客様をお招きしてこうやって会食、その他色々ございましたけれどもこれはたまたま現北ロータリークラブの梨本会長さんと私との間で国際交流とは何んだらうかと、あるいは三条にいて国際交流する方法はないだらうか、ロータリアンと言うのは国際的なのにどうして日本だけで、もっと輪を広げる事が出来ないだらうかと言う

様な話し合いが前々からございました。そこで私はここに出ておりますJICAと言う略称の団体に時々所属を致しまして仕事をして来たいきさつがあって、その中で気の付いた事をお話をしたのです。先程梨本会長がお話されておりましたけれども日本に今、その問題になっているのは留学しておられる方たちが、日本人の家庭となかなかうまく接触出来なかったとか、あるいは円高のせいで留学生のふところ具合が非常に厳しい状態になっていて自分達が食べるのに一杯、学校のものを買うのに精一杯というような所に何かお手伝いする事が出来ないだらうかと言う事から、たまたま、結びついたことでございまして、私は個人的に今回北ロータリークラブの皆様方がその海外からのお客様をお自分の家に1泊してもらってそして家族との付き合いも深めていこうと言う事を実現していただいた事を非常に感謝している次第でございます。実はそのロータリークラブ、どこの町に参りましていわずの中堅クラス、重要なその町の活動の中核になっていらっしゃる方々ですから今回のお客様としまして、いろいろな案があったようでございますけれども、梨本会長の考え方あるいは幹部の皆さんの考え方で国と国との間の付き合いでもって日本に来ておられる方、つまり、それぞれの国に帰られると我々と同様にその国の中核に入っておられる方々とかいう人達とお付き合いというものはひと味、又違うのではななからうかと言う様な事になりました。そこで私は四月に今日のお客様と一度顔合せをして一諸に勉強して参りました。つまり私にとりまして大変大事なお友達なんです。次に私の話したい本論に入りたいと思います。国際協力事業団と言う団体がございまして本部は現在新宿に建っている高層ビルの一つ三井ビルにございます。そこで何が行なわれているか、意外と国内でこれを理解していらっしゃる向きが少ないと思われます。国際協力事業団と言うものの名称は国内向けでございまして外国では「ジャパン・インターナショナル・コーポレーション・エージェンシー」と言う四つの言葉をとりましてJICAと略称している訳です。これをジカと言っている国もございます。これは純然たる国の事業を実施する機関です。この発祥は1958年に遡るんです。日本が戦争に敗けてそこから復興しかけた頃、世界の各地で独立とかあるいは新しく分離して国が増えたとか、さまざまな問題がございまして当時は後進国と言う言い方もあった訳です。で、現在は後進国と言う言葉がいかに遅れてでて来たかと言う意味あいを持

っていると言う事でこれは何が遅れて何が進んでいるのか、工業技術だけが進んでいけば進んでいるのかという議論がたくさんございまして、豊かな暮らしに向けて開発しようとしはじめた国と開発が済んだ国と言う事で開発途上国と言うような新しい言い方が出ております。そして実質的には暮らし向きが楽でない国、こう言う国に対して暮らし向きの豊かな国が何かをしなければいけないのではないかと言う発想でスリランカでもって実は会議があった時に、日本ももう戦後の復興がかなり良くなって来ているので仲間に入ったらどうかと、もちろん提唱しているのはヨーロッパ、アメリカ、ソ連等の大きな国々でしたけれども、そこへ力の出せるだけお手伝いをして欲しいと言う要望が出まして日本もそこへ入った、ですからそれからかぞえますと、かなりの年数をやっている訳です。この国際協力事業団と言う名前が、あるいは事業団法と言うのができて国の機関となるまでには10数年間の期間がありましたけれども、その間にさまざまなころみがなされて、そして現在では日本と外国の国と国との付き合いと言う事でありまして、外務省が窓口になっている訳です。その他に何がそのみんなの暮らしを豊かにするかとと言うと農業であり、工業であり、あるいは衣料であり、建設事業とさまざまな分野にまたがっているものですから、日本の各省庁がそれぞれに開発途上国にお手伝いしなければいけない時に力を出すと言う事で部門を持っておりますけれども、それを実際に動かすのに一つの協同の役所をつくった訳です。それが国際協力事業団と言う訳で、三条は見えない形で事業団にかなりいろんな面につながっておりました。と申しますのは、初期の頃は農業技術と言う事で農業技術の日本のやり方を海外に見せるとか、あるいは新しい作物の改良をするとか言う問題になりますと、よくて安い道具がいるという事で、三条近辺の器具が事業団を通して海外に持って行かれている訳です。もちろん実施団体ですから、そこには技術を持った専門の人達が所属しておりまして、いろいろな問題があると海外に派遣されるとこれが一つの柱なんです。まだこのほかによく新聞やテレビに出て来ますけれども日本の若い人達に外に出てもらって国のお金で勉強して来てもらう海外青年協力隊と言う制度も一つある訳です。これは現在千何百人と言う若い人が外国へ行っている訳です。とかくその日本の新聞、テレビの取り上げかたは日本青年の技術を開発途上国に持って行って役立てだと言ういい方をしますけれどもそうではなくて日本の青年を受け入れて勉強させてくれるかどうかと言うそのポイントがかくれている訳です。ですから昔の言い方にしますと日本の若い人の武者修業とそれに対して政府がお金を出して何んの見返りもなく若い人達の経験をつんで帰って来てもらう、それがいつしか外国へ行った若い人達はやはりそれぞれに考えて自分達でもってお手伝いする事があったらやりましょうと言うボランティアの部分も実は合わせてやって来ていると言うのが実状なんです。したがっていましてそう言うものと専門の技術者が行って仕事をすると言うのと全然性質が違うと言う事が言える訳です。その他に日本がお手伝いをして欲しいと言われて外国の人達と打合せをして何かをやった時に日本が予算が終って帰って来てしまった後、それを自分達の国の為に役立てるようにする人材を養成しなければいけない、そういう意味あいでは現地でもって教育、訓練と言う事もやりますが逆に今日のお客様のように日本に来て載いて、日本を勉強してもらって、そしてそれを自国へ持って帰って載くと言う研修生の制度と言うものもあるわけなんです。こう言う様な色々な仕事これが実は簡単に言うと日本の国とまわりのいろんな国との役に立つお付き合いの一つと言う事になる訳なんです。ここでもって国際協力事業団が現在どれ位の仕事をしているかと申しますと、予算でみますと昭和63年度の予算は約1100億円です。そして事業団に所属している職員が1200名位です。それ位の数になっている、現在外国から日本に